
僕の親は無限の欲望

楚良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の親は無限の欲望

【Nコード】

N2357BA

【作者名】

楚良

【あらすじ】

気が付いたら目の前には神様が！

主人公はなんでか前世の記憶を持たぬまま転生！

転生先はまさかのスカリエッティのアジト！？

他の転生者がいる中、原作知識どころか前世の記憶がない主人公はどうするのか！？

プロローグ？（前書き）

どうも、楚良です。

頑張って完結まで持ってい行けるよう頑張ります。

ちなみに転生もの初挑戦です。

応援してくれたらうれしいです。

プロローグ？

「突然だがお主には転生してもう」

「はあ？」

少年が気がつくところそこは一面真っ白。
水平線の向こうまでが真っ白で、障害物はおろか、雲も太陽も何も
ない空間だった。

そして少年の眼の前には無駄に髭の長い老人。

一瞬、頭打っておかしくなったか？と思ってしまうが、この老人は
限りなく正常だ。

「おじいさん、何言ってるの？もしかしておばあちゃんが死んだか
ら狂って」

「すまんがわしは正常じゃよ。話を進めたいんじゃないか？」

「ダメって言ったら？」

「地獄に墜とす」

「サーイエッサー！」

〈老人の説明開始〉

この老人はなんと神という存在だった。

少年は神に少しだけだが喧嘩を売っていたのだ。

しかし、この神様は本当に優しい。
そんなことをなかつたかのように接してくれた。
しかも人の心が読めるらしく、少年の考えたことは筒抜け。
少年はビックリしていたが、そこまで驚かれなかつたことに神様は
少し落ち込んだとか。

それと転生させてもらえる理由が気まぐれらしい。
適当に選んだのがこの少年ということだ。

「という訳で好きな望みを言え。何でもかなえてやるぞ」

「その前にどの世界に転生するの?」

「そういえば言ってなかつたの。『リリカルなのは』の世界じゃ」

「・・・マジ?」

「大マジじゃ」

『魔法少女リリカルなのは』

二次創作などではよく見かけたりする。

各言つこの少年も結構好きなアニメでもあるのだ。

そこで少年はあることを思いつく。

神様が何でもかなえてくれると言つことなので早速頼んだ。

「それと、スカリエツティ側」

「良いじゃろう。して、他には?」

「そして最後に」

「前世の記憶を消してくれ。原作知識も全部」

「……お主、本気で言っておるのか？」

「おう、二度目の人生だ。前世の記憶に邪魔されたら詰まんないだろ？」

「はっはっはっ！お主のような人間は始めてじゃ！よし、これも何かの縁。特別特典を授けよう！」

「いらないけど、一応受け取っておくよ」

「それと、最後に忠告じゃ。お主の他にも転生者はおる。気を付けるのじゃぞ」

「……記憶消すんだからそれ意味なくね？」

「つべこべ言わんで、行って来い」

そう言つと、少年の足元が丸く、黒くなる。

さらに言つと脚が地面についている感覚がなくなった。
つまりは

「落ちんのかよーっ!!!」

プロローグ？（後書き）

次回はキャラ紹介（たぶん
その次から本編となります。

キャラ紹介

名前：アイク（人造魔導師なので名前のみ）

年齢：10歳

性別：男

容姿：黒髪、金色の瞳

性格：家族思い

スカリエッツィだけ異常程と言っていていいほど大切にしている

術式：古代ベルカ式

備考：オリ主でも何でもないとただの転生者。

前世の記憶を消してもらおうという暴挙に出たため神様のお気に入り
になったらしく、特別特典で『風』との変換資質と『戦いの才能』
を貰うが転生前の記憶がないので知らない。しかしナンバーズ達と
の訓練中変換資質を使えることに気づく。

転生先の条件を「スカリエッツィ側」としか言っていないので突然
アジトの目の前にいたとかではなくスカリエッツィの駒として作ら
れた人造魔導師になって転生。

そのため本人はスカリエッツィを「父さん」と呼んでいる。

魔力光は何が起きたのかわからないが無色透明。

基本、魔法陣を展開すると白色となる。

ユニゾンデバイスとユニゾンすると魔力光が無色透明なので、シグ

ナムとアギト、はやてとリインと言ったペアよりも融合率が高く、融合機を選ばない体質。だがその肝心の融合機がないのでその体質は無意味なものとなっている。

デバイスはスカリエッティが作ったインテリジェントデバイス『ラグネル』。通常のシュベルト（Schwert）フォルム、速さに特化した逆手二刀流のタクオン（tachyon）フォルム、一撃の威力に長けた超巨大剣ザンバー（zanber）フォルムの3種類。

カートリッジ内蔵型でレヴァンティンと似た構造。

無口だが物凄く高性能なデバイス。

バリアジャケットを着ると必ず白い鉢巻を付ける。

メインカラーが白の騎士甲冑。スピード重視なため籠手と胴当ては付けていない。

第01話 動く転生者達

アイクの目が覚めた時は、何か得体のしれないポッドの中だった。意識がはつきりしないまま見えたのは、紫色の髪をした男性。

広域次元犯罪者でもあり、マッドサイエンティストとも呼ばれる科学者『ジェイル・スカリエッティ』

当初、スカリエッティはアイクに興味などなかった。

所詮は後の祭りが必要になる駒。それぐらいにしかとらえていなかった。

しかし、その考えはアイクが成長し、7歳のころにポッドから出た後が変わった。

まず一つ目にアイクはスカリエッティのことを『父さん』、つまりは父親としていた。育てるのが面倒だったスカリエッティは自分の娘たち ナンバースにそれを押し付けるが、この時から少しずつ興味を示していた。

二つ目に、何度も何度も「手伝いたい」と言ってきたこと。

正直、スカリエッティにとっては研究の邪魔でしかなかった。

だが一度手伝わせてみると、アイクは驚くほど熱心に手伝ったのだ。親に認められたいという子供の性質なのか。それはわからなかったが、スカリエッティはアイクに強く興味を示していくようになり、デバイスを作成するなど、父親らしい行動に出た。

三つ目に料理を始めたこと。

ナンバースはもちろん、スカリエッティも基本栄養食で済ませている。

固形ブロック状のものや、ゼリー状のもの。

しかし、アイクはそれを見た途端何かに火がついた。

「そんなんじゃない体に悪い！」と言いだし、セインと街に出て買い物に行き、帰って来るやいなや料理本を片手に料理を開始。

悪戦苦闘するもようやく出来上がった料理はとてもおいしかった。

これはきつと、家族を大切にしたいというアイクなりの考えなのかもしれない。戦闘機人といえど、人は人。体が壊れては大変だと思っただろう。

そして四つ目。

アイクの戦いに対しての適正度だった。

初戦闘でトーレに先手を打つと言う偉業を成し遂げた。

持っていたインテリジェントデバイス『ラグネル』の特性を瞬時に理解し、フォルムチェンジを駆使してトーレを翻弄。勝ちはずなかつたものの、それは褒められるものだった。

さらに後の訓練では『風』の変換資質を見せつけ、スカリエッティのアイクへの興味がより強くなる。

応用力も高く、閃きも子どもならでわで斬新。そのおかげなのか、アイクはまさし人造魔導師らしく、戦うために生まれてきたようにも感じられた。

「アイク。少し頼みたいことがあるんだが、いいかい？」

月日は経ち、3年。

アイクは今10歳となった。

他の転生者に襲われることもなく、平凡かつ平和にナンバーズ達と日々を楽しく過ごしていた。

そして先ほど、父親であるスカリエッティに頼みごとを言われた。

内容はまだ知られていないがアイクは、父親の頼み、ということ

で快く引き受けよう。

その頼みごとの内容とは、リニアールにあるレリックの回収。少し前から集めている事を知ったアイクは、手伝いたいと思っただ。

そしてようやく出番が回ってきたのだ。うれしくないことはない。

そしてこれは原作の一部だ。

時空管理局機動六課の初任務。

アイクは知らないが、必ずリニアールで接触するだろう。

さらに管理局、もっと言えば六課に所属している転生者とも鉢合わせだ。

原作にいないアイクを見れば、すぐに転生者だとばれるはずだ。

そうなれば命を狙われる危険性も高いだろう。

しかし、アイクには前世の記憶がない。

転生者かどうかと聞かれれば「知らない」と返すことしかできないため、運が良ければ並行世界の住人として見られる。

だが、そうなる場合は限りなく少ないだろう。

そう都合よく勘違いされるなど、夢の中やアニメの世界だけだ。

「わかった、行ってくるよ」

アイクはそんな原作なんて知らず、リニアールに向かう。

自身のデバイスであるラグネルを待機状態にし首から下げ、アジトを出て行った。

場所は変わって機動六課。

ここに、2人の転生者がいた。

1人目の名前はシン・ミッツリ。

母親が地球出身、父親がミッド出身のハーフ。

テンプレで、転生前の容姿と同じく黒髪、黒眼。

自らをオリ主と思わず、ただ原作を守りながら原作キャラ達と楽しく過ごそうという考えで介入した転生者だ。

魔力ランクAA、魔法の才能を持ち、無印時代から原作に介入。なのは達との関係もそれなり。ハーレムなんて目指さずハッピーエンドを目的としている。

2人目の名前は衛宮健斗。

銀髪、赤と緑のオッドアイな自称オリ主。

親はおらず、親戚に引き取られて学校に通っていた。

シンとは違い、ハーレムを目指す変態転生者。

魔力ランクニアS、レアスキルとして『無限の剣製』を持ち、これまたシンと同じように無印時代から介入。ニコポ、ナデポは神様にダメと言われたらしい。

根は物凄く善人なのだが、目的のせいであまりよく見られていない。

この2人、無印時代、A・Sでは敵対していた。

シンはフェイト側、管理局側。

健斗はなのは側、ヴォルケン側。

ヴォルケنزには最初、全く信用されていなかったが、いろいろあったため協力できた。そして中学時代を経てSTSでは同僚となった。

当初、というか今もだが健斗はシンをあまり良く思っていない。

オリ主の邪魔をするモブキャラと見ていたのに、今では自分よりも原作組、特にフェイトと仲がいい。全員にフラグを建てたはず、と思っっているがそんなことは全くなかったのだ。

そして今日はいよいよ原作での六課初任務。

原作知識のある2人は少しばかりいつもと違い、そわそわしていた。今までイレギュラーは特になかった。

闇の欠片事件が起きたが、その後は特に何もなし。

15歳の時のミッドの火災事件の時も特に何かあるわけではなかった。

しかし、この原作が始まるとどうなるかわからない。

良く似た並行世界であることは神様から言われわかってはいたが、特に違う部分が見当たらなかった。つまりはSTSから何か起きると2人は踏んでいたのだ。

「このアラートって！」

「第一級警戒態勢!？」

六課の隊舎に響くアラート。

初任務開始の合図ともいえるアラートを聞くと、シンはより一層気合を入れる。イレギュラーがあるかもしれない。

もしそんなことがあれば原作と同じに行くかわからなくなる。

その顔を、横にいたなのは違う意味で理解する。新人たちいいところを見せよう、と思っっているのだらうと勘違いしたらしい。

「全員、初任務だ。気合入れろよ」

『はいっ……』

第01話 動く転生者達（後書き）

次回、早速戦闘です。

展開速いですけど気にしないでくれると嬉しいですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2357ba/>

僕の親は無限の欲望

2012年1月6日21時48分発行